火野葦平「麦と兵隊」論 —— 戦争文学への一視点

A Study of Hino Ashihei's Barley and Soldiers with a View on the War Literature

陳　　徳　超*

CHEN Dechao

（要旨）

「麦と兵隊」は、別名「徐州会戦従軍記」のごとく、火野葦平が一九三八年の徐州会戦への従軍体験に基づいて書いたものである。同作は日記体という形式を取り、五月四日に始まり、同月二二日をもって終わっている。従来の研究において、火野葦平がこの作品を通じて日中戦争に協力した戦争責任があるという論調と、彼はひたすら「民衆」を描いていることで反戦思想を告白しながら軍国主義の犠牲者になったという評価が並行しており、両者の間には乖離が見られるのだが、その乖離をどのように埋めていくかが本稿のモチーフである。

そのために、本論では、まず作品に出てきた中国人像に着眼し、それらをその文脈に即しつつ綿密に分析することにより、戦場における作者の中国人観の貧弱さ、彼がそのような「異民族」表象を通じて日中戦争に加担してしまったことを検証する。しかし、だからといって、その記述が庶民的な視座を持っていることとは、決して矛盾しない。戦争に協力したとはいえども、作家の主体性が根こそぎ失われたわけではない。それを証明するために、作中に出てくるいくつかの場面に焦点をあてて論じていく。最後に、「麦と兵隊」には、一見対立しているように見える二面性が併存しているのだが、それを同じ創作方法、すなわち同じ「ありのまま」の表れとして統一的に把握する必要があるというのが筆者が論じたいところである。

一、問題の所在

昭和一〇年代の文学研究、ことに日中戦争勃発後の文学状況を問題化しようとする場合、火野葦平（以下、葦平）の「麦と兵隊」（『改造』一九三八・八）という作品は避けて通ることのできない存在である。発表当初はベストセラーとなり、一九三八年以降敗戦まで盛んとなった戦地ルポルタージュ文学を方向づけることにもなったこの作品は、日本の敗戦を境に一転していわゆる進歩的文学者[1]から批判され酷評されるようになる。こうした視座から、現在に至るまで数多くの論者によって論評されているが、その中には、以下のような対立が存在している。

例えば、一九四八年三月に葦平が占領軍による文筆家の追放仮指定を受けた際、志賀直哉らは「兵隊三部作」（「麦と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」）等日中戦時下に書かれた諸作品は「明らかにヒューマニズム立場にあって、毫も軍国主義的色彩なく」「反戦的色彩すら濃厚であること」[2]を確信し、証言する。一九

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程２年（The Graduate School of East Asian Studies,Yamaguchi University）

Journal of East Asian Studies, No.16, 2018.3.（pp.143-154）

六五年、吉田精一は『現代日本文学史』で「麦と兵隊」を、「戦争のうちに人間的なものを追究しようとするヒューマニズムが流れていて、以後続出した戦争文学中の圧巻となっています」[3]と評している。しかしながら、安永武人はこの種の読み方を「作品の部分的な一側面をもって、あたかも全体の本質的な特徴であるかのような印象を与える解説」[4]と一蹴して、「麦と兵隊」と「土と兵隊」で削除されている、日本軍による中国人捕虜の殺害場面をめぐって、自らの論[5]を展開する。

また、池田浩士[6]は「麦と兵隊」「土と兵隊」の文体を手掛かりに、これらの作品が銃後の読者を巻き込みつつナショナリズムの醸成に関わっていくメカニズムを明らかにしており、松本和也[7]は「麦と兵隊」をめぐる同時代の評や単行本の広告等に注目し、当初は「麦と兵隊」に対する文壇内外の過熱ぶりは、銃後のメディアが「戦争」に向けられた国家的欲望に淫した結果、国民の「戦争」への一体化とパラレルなものであったと指摘している。それらに対して、増田周子は「火野の戦争作品は、決して戦争を鼓吹するものではなく、戦時下で見てきた真実の兵隊の姿を作品化したものであり、その兵隊の真の姿が人々に感動を与えた」[8]と主張している。

更に、「兵隊三部作」に描かれている中国人像をめぐり、歴史学者の成田龍一は川村湊らとの鼎談の中で、葦平を「帝国の眼差し」[9]を持っている作家として捉え、特に「他者」を描写する時にそれがはっきりと表れてくるという。一方、玉井史太郎は、報道部にいろいろな制限を加えられても、葦平は身についた正義感を曇らせることなく、一兵隊としての視点を貫いて、戦場における兵隊たちの姿を、敵味方なく温かく見つめている[10]と述べる。

以上、「麦と兵隊」に対する数多くの研究からいくつかの具体例を取り上げて論者たちの対立を素描した。要するに、戦争協力の文学なのか否か、これらの論考は今日でも一つの定論まで至っていない。これが、「麦と兵隊」を論ずる際の、或いは葦平を論ずる際の賛否両論になるわけなのである。その溝をどのように埋めていくかが本稿のモチーフである。そのためには、テキスト分析の原点に立ち、「麦と兵隊」をその筋（プロット）や場面（シチュエーション）に忠実に即しつつ精査していく姿勢が大切になってくる。

すこし敷衍していくと、作品のモチーフが作者の主観によって定められる。ある一つの文学作品は、それを作った作者の自己表現と関連すると言える。作家の自己表現は、また作家の現実認識や価値観の次元に還元することができる面がある。しかし、作品を作家の世界観の表出とする考え方は文学作品の理解の仕方の唯一のものではないのである。作品は場合によっては作家の意図を超えて真実を語る。つまり、読者側からすれば、作者の意識していないものが作品に表れてくる。一つの文学作品は表現の客観性としてみると、それを作者の主観の側に還元するのでなく、作中素材は作者の主観的認識を越えてそれ独自の生命を生きようとするのである。文学作品を批評するには、この両方を同時に考えておく必要がある[11]。「麦と兵隊」に即して言えば、作者の葦平が何を描こうとしているのか（内容）だけではなく、どのように描いているのか（形式）の面も視野に入れ、内容と形式の二面を全体的作品評価の下で統一的に把握することが要求されてくる。けれども、それ以前に、そこではまず論者自身の戦争認識のありようと現実へ関わる姿勢が問われるはずである。それがなければ、どのように緻密な作品分析も結局空しいものに終わるほかないだろうからである。

二、「異民族」表象

「麦と兵隊」には、「敵方」の中国軍や中国民衆をめぐる表象が度々出てくる。例えば、「五月十四日」の項、中国兵捕虜に対する描写を引いておく。

> 捕虜が入り口の門の木に四人座っている。（中略）何時でもそう感じるのだが、私が、支那の兵隊や、土民を見て、変な気の起こるのは彼等があまりにも日本人に似て居るということだ。然も彼等の中に、我々の友人の顔を見出すことは決して稀ではないのだ。それは実際、あまり似過ぎているので困るほどである。（中略）これは、大きな意味で、我々と彼等とは同文同種であるとか、同じ血を受けた亜細亜民族であるとかいうような、高遠な思想とはまったく離れて、眼前に仇敵として殺戮し合って居る敵の兵隊が、どうも我々とよく似て居て、隣人のような感がある、ということは、一寸厭な気持である。（四〇頁）

一見、ヒューマニスティックな描き方が成立しているように見える。ただし、ここで二点留意しておきたい。一つ目は、「我々と彼等とは同文同種であるとか、同じ血を受けた亜細亜民族であるとかいうような、高遠な思想」とは別次元だと葦平が断言する時、彼自身は、すでに「我々」を「高遠な思想」、或いは「高邁な理想」を掲げている「天皇陛下の赤子」＝「皇軍」として、「究極的価値」と連なることによって「彼等」の前で限りなく優越的地位に立っているという点である。

即ち、葦平が日本軍と殺戮し合っている「敵側」の兵隊に対して、「隣人のような感」を抱いているのは、「高遠な思想」の所有者としてのものではない。それは単なる日常的な次元にまで降りてきた時に抱くところの、いわば普通の日常的な生活者としての感情であった。なぜなら、葦平は次のようにも述べているからである。

> 一家の繁栄と麦の収穫とより外には彼等には、何の思想も政治も、国家すらも無意味なのであろう。戦争すらも彼等には、ただ農作物を荒らす蝗か、洪水か、旱魃と同様に一つの災難に過ぎない。（二八頁）

要するに、葦平にとって中国民衆には、戦争に対する当事者としての意識はない。自然災害が外からやってきて「彼等」を痛めつけるように、戦争も外部からやってくるという認識である。「彼等」にとって自分の命と「土の生活」ほど重要なものはない。だから、「彼等」は日本の兵隊を見ると自分の命を守るために「へらへら」と愛想のよい笑顔を作って見せたり、お茶を出してサービスしたりするのである。もちろん、葦平にとってこれは、一身の安全を図って日本軍へ媚を売る行為であり、「一種の軽蔑に値する」[12]ことであろう。

二つ目は、葦平は中国兵捕虜を一瞥し、彼らの顔が「どうも我々とよく似て」いるので、お互いに殺し合っているのは、「一寸厭な気持」だというところである。となると、この「一寸厭な気持」は、中国兵の命を大切に思っていることから発せられたものなのか否か、という疑問が生じてくる。同じような表現が、中国人農夫への表象にも出ている。

中国人農夫に対して、葦平は「木訥」で笑わないタイプの農夫と、日本軍に遭うと「へらへら」と笑うタイプの農夫の二種類に分けて描写している。前者に対しては「親しみを覚え」て描いているが、後者に対しては蔑視に近い眼差しを送っている。例えば、「五月七日」の項、日本軍が中国人農夫を集めて、

奴隷化教育を行っている時、葦平は「へらへら」と笑わないタイプの農夫に対し、「限りなき親しみ」をもって次のように描いている。

ここに集まった代表はことごとく、純粋な農夫ばかりと思われ、もとより教育などあろう筈はなく、身体つきは頑丈で、色は真黒に焦げ、顔は折り畳んだような深い皺で刻まれ、伝単を受け取る手は節だらけで八角金盤のように広く大きい。彼等は町の支那人のように日本の兵隊を見てもへらへらと笑わない。黙々と伝単を受け取り、それを読むでもない。（中略）私はこれらの朴訥にして土のごとき農夫等に限りなき親しみを覚えた。それは、それらの支那人が私の知っている日本の百姓の誰彼によく似て居たせいでもあったかも知れない。（一六頁）

中国兵を描く時、日本軍と殺戮し合っている「敵」の兵隊が、「どうも我々とよく似て居て、隣人のような感がある」から、「一寸厭な気持」が沸いてくる。また、ここに描かれている中国人農夫も、「私の知っている日本の百姓の誰彼によく似て居た」から、「私」は「彼等」に「限りなき親しみ」を感じている。要するに、葦平は中国人の境遇には日本人の姿を見つけたら、中国人に対して「親しみ」を感じ、もし、見つからなかったら「にやにや」或いは「へらへら」と、軽蔑した口調で描く。そうなると、この種の「親しみ」や「一寸厭な気持」は、いったい誰に向かっているものなのか。

また、「五月十二日」には、日本軍の機嫌を取るような行動をする「支那農民」についての描写がある。

小休止をすると、部落では支那人が両手にぶら下げられるだけ鶏を捕えて来て、提供しようと云う。兵隊が鶏を追っかけて居ると、竹棒を持って来て手伝うのだ。殺した豚の皮を剥いでくれる。（中略）支那人は日本の兵隊を見るとへらへらと御機嫌を伺う例の笑い方をする。此方が馬鹿にされているようだが、彼等は此の危機を切り抜けるために全く一生懸命なのだ。その切実なる努力はもとより笑えないものがある。（三三頁）

「我々」を映し出すための、鏡としての「彼等」の表象的構築。「麦と兵隊」だけにとどまらず、葦平は「土と兵隊」[13]（『文芸春秋』一九三八・一一）と「花と兵隊」（『朝日新聞』一九三八・一二～翌三九・六）の中においても、日本と「支那」、支配と服従、文明と愚昧、優越と卑劣などのような一連の二項対立主義的な対概念を何度も反復し、やがて非常に強固な二元論的枠組を形成する。それによって後進や劣等などに代表されるような中国人とは異質な自己像が構成されてくるのである。

そもそも敗戦直後にアメリカ占領軍の進駐を前にした日本にも、各地で婦女子の避難が相次ぐなどのパニックがあった。一九四五年七月、「本土決戦」にあたり葦平は福岡市の西部軍管区報道部に白紙徴用され、そこで敗戦を迎えた。その後、アメリカ軍上陸への恐怖に町中を右往左往している避難民の流れに揉まれながら、宿泊したホテルから報道部へ行こうとしている葦平は、一九六〇年に「革命前後」という彼の作品で当時の心情を次のように吐露している。

昌介（葦平の化身、引用者注）はこの流れを乗り切って、早く報道部へたどり着こうと努力しながら、胸の締付けられる思いから脱れられなかった。こういう哀れな群

衆を何度か戦場で見たことがある。（中略）昌介は無惨な日本人の流亡の姿にもみくちゃにされながら、戦争への憤ろしさ、呪わしさに、ほとんど身体の震える思いを味わっていた。[14]

続いて、母へ電話をかけておこうと、公衆電話のある駅の入り口の方にまわった「昌介」は、奇妙な光景を見る。女事務員も交えて、七、八人の駅員達がせっせと紙の小旗をこしらえているのである。日の丸の旗ではなく、アメリカの旗や、イギリスの旗であり、よくみると、「支那」の青天白日旗や、ソ連の赤旗もある。「昌介」はいきなり脳天に雪崩でも落ちてきたような激しいショックを受ける。

戦中、このような人間が、中国にも日本にもいたことを指摘するより、葦平が両国民を見る目が、まったく違っていることが論者の関心事である。無惨な日本人の流亡の姿に揉みくちゃにされた葦平は戦争に対する激しい憤りを抑え切れなかった。しかしながら、日本軍の機嫌を取るために、一生懸命「へらへら」と笑ったり、お茶を出して歓待したりする中国人に対して、ほぼ咎めに近い口調で「此方が馬鹿にされているようだ」と、或いは日本軍に「茶でも飲ませて喜ばせて誤魔化して置いて、早くこの麦畑から追っ払ってしまえばよいのだ」としか、感じ取っていない。

確かに、「庶民作家」といわれている葦平は、生い立ちから来る下層民への共感と連帯を戦場においてもそのまま保っている。そのような庶民的な眼差しが「敵側」の中国民衆にも及んでいる。「麦と兵隊」で葦平は、自分たちが堅持している「美しい理想」が大量死を伴っていると気づいたところに自らの人間的に揺れ動くさまを率直に披露している[15]し、川村湊が指摘しているように、彼は一兵士であり一庶民である自分たちと闘っている中国の民衆が、同じ一兵士、一庶民なのだという観念も編み出している[16]。しかしながら、総じていえばその基本的枠組みにおいて日本＝「国籍」を超えるものではない。その中に描かれた中国の農民像、即ち戦争すらも自然災害と同じ一過性のものと受け止め、極限状況の中にも挫けず「土の生活を続行する」ような人々の次元においては日本の民衆と聊かも変わらないというこの論理も、植民地主義を正当化する文脈で用いられる時、「敵対者からの眼差し」によって中国民衆に投げかけた偏見を根本から変えることはない。

三、作家の主体性

前節では、「麦と兵隊」における葦平の中国人観の貧弱さを考察した。しかしながら、当時の歴史的な状況を念頭に置いて考えると、「麦と兵隊」が従軍記である以上、中国民衆に対する差別意識を葦平の作品が内包していることは、むしろ当然だといわざるを得ない。そして、この作品が帝国主義の国策に沿っているものである[17]としても、葦平の作家としての主体性が根こそぎ失われたわけではない。

以下では、作中に出てくるいくつかの場面に照準をあわせて検証していくが、その前にまず当時の軍部が葦平に執筆にあたって加えた検閲を押さえておこう。葦平自身がいっているが、戦中、「兵隊もの」を書く時に、一、日本軍が負けていることを書いてはならない、二、戦争の暗黒面を書いてはならない、三、味方はすべて立派に、戦っている敵はすべて憎々しくいやらしく書かねばならない、四、作戦の全貌を書くことを許さない、五、部隊の編成と部隊名を書いてはならない、六、軍人の人間としての表現を許さない、七、女のことを書いてはならない[18]、という表現制限

事項を加えられていたようである。では、この外圧的な悪条件を葦平は一体どのように克服して作家としての内的主体性を保とうとしているのか。

さて、五月八日に行軍の疲れで小休止したある部落で、桑の木の下の円筒形の石の上にみすぼらしい老婆が一人腰掛けている。最初老婆は日本の兵隊をおどおどした眼つきで見ていたが、やがて立ち上がると、腰をかがめて歩き出し、何やら手を上げ下げし、妙な身振りをして泣き始める。老婆に泣いた理由を尋ねた梅本は、「あれは、支那の兵隊は部落に来ると、米も銭も衣服も姑娘も何もかも洗いざらいを持って行ってしまうが、日本の兵隊は何も盗らないから非常によい、と追従を言っているのだ」と説明している。

老婆が「我々」に感激しているような描写である。制圧者である彼らが、その被害から先住民を守ってくれる親切な介入者であることが主張される。そうすることによって、「敵」の中国兵と現地住民の好意獲得競争が行われ、彼女らを「悪」から救い出すという大義名分によって自らの植民地主義を正当化するのである。日本軍の征服行為を容認して反対の声を挙げない同意者として、この老婆のような先住民がいれば、申し分がなかったろう。

ところが、ここで「追従」という言葉に注目したい。老婆が「追従」をいっていると書いている時点で、「日本の兵隊は何も盗らないから非常によい」という言葉の真実味はある程度失われていると考えられる。つまり、この作品が単に侵略戦争の正当性や日本軍の善良さといったものを銃後にアピールする目的で意図的に書かれたのならば、寧ろ「追従」という言葉を入れなかった方がより好都合なはずであろう。

また、同じような場面について、

> 百に近い屍体で埋められて居る壕の続きに、沢山の土民が居た。（中略）まっ裸の子供を両手に抱えたり、乳を銜えさせたりして居る女が多い。痛ましい眺めである。彼等の不安の表情は正視に堪えないものがある。兵隊が子供に熱量食の菓子をやって居る。煙草をやる者もある。彼等は猜疑深い表情をし、なかなか受け取らない。兵隊は大喝して銃剣を突きつけた。ようやく子を抱いた女は煙草を手に取った。一口二口吸って、初めて笑った。（八一頁）

という箇所がある。このシーンのテーマは日本軍による「好意」であろう。だが、この兵隊が上記のように無理やり中国人女性に「恩恵」を押し付けていることをそのまま表現している葦平は、意識すると意識しないにかかわらず、逆に日本兵の傲慢で支配者的な行動を正面から暴き出しているのではないか。兵隊は女性の意志にもかかわらず、彼女に大喝しても、銃剣を突きつけても自らのやったタバコを受け取らせたい。彼の「好意」に従って服従すれば、生存の権利が認められるが、拒否したり無視したりすると、武力をもって罰せられ、場合によっては命まで落とされてしまう。となると、これを描くことは先述した「戦争の暗黒面を書いてはならない」という軍の制約、及び銃後の日本人に日本軍の美しい姿をアピールするという目的と矛盾することになるであろう。

作品の最後に三人の中国兵捕虜が殺されている。捕虜たちに聞くと、彼らは飽くまで抗日を貫くばかりでなく、「此方」の問いに対して何も答えず、肩を怒らし、足をあげて蹴ろうとしたりする。甚だしいものは「此方」の兵隊につばを吐きかける。それで処分するのである。縛られた三人の「支那兵」は事前に準備してあった壕を前にして座らせられ

る。後ろに廻った一人の曹長が軍刀を抜く。掛け声と共に打ち下ろすと、首は毬のように飛び、三人の「支那兵」は次々に死んでいく。この一部始終を見ている「私」はとうとう見るに忍びない。

私は眼を反らした。私は悪魔になっては居なかった。私はそれを知り、深く安堵した。（八七頁）

もともと、この血なまぐさい殺傷場面は戦時中、軍の検閲で削除された部分[19]を、戦後、原稿が見つからないまま、作者が「昔を思い出しながら」[20]書き加えたものである。それゆえ、もし悪意をもって推測すれば、この加筆行為の中にすでに戦後の価値観、即ち「侵略戦争」＝「悪」が反映されていると思われても何の不思議もない。しかし、逆にいうと、その一節が削除されていることから、そこで描かれたものが軍の意向に反しているということはいえるであろう。もし内容的にもとの原稿とはそれほどかけ離れたものでなかったとすれば、軍の検閲にもかかわらず「そのぎりぎりの範囲内」[21]で戦場そのものを描こうとしている葦平のこの姿勢を積極的に評価してもいいのではないか。

それに、日本軍の残虐行為を描き、毒ガス使用の事実を、「ない」と否定することで、そこに「痕跡」だけを残しておく[22]という方法を取った葦平とは対照的に、同時期に「戦線」（朝日新聞社、一九三八・一二）や「北岸部隊」（『婦人公論』一九三九・一）といった従軍記を発表した林芙美子を想起させずにはおられない。一九三八年の「漢口攻略」をもとに「戦線」を書簡体で書いている芙美子は、その作品の中で戦列の美しさや兵隊の壮烈な戦死などをひたすら賛美しているだけではなく、中国兵の死体を見た感想を彼女は次のように率直に記している。

私の神経は実に白々とこれらの死体を見守っていられます。（中略）日本の負傷者へのあの感傷は、生涯忘れることができませんのに、中国兵の死体は、私に何の感傷もさそいません。[23]

同じ従軍記とはいえ、「敵」の死体を見た時、人間的な揺れ動きや批判的な視点の有無で二作品には大きな違いが見られよう。もちろん、「麦と兵隊」の最後において結果として戦争のある側面の悪を捉えることが安直な自己肯定に短絡したということも否めないし、安永武人が指摘したように、この軍隊批判が作者の意識的な次元において戦争批判へとつながっているとは到底いい難い[24]。しかし、この場合我々が見過ごしてはならぬことは、作者の価値観と、その価値観に基づいて描かれた世界との間に働く相互作用は必ずしも常に意識的であるとは限らない、ということである。すでに述べたように、作者の真意がどうであろうと、作品が常にその意図を過不足なく表象するわけではない。ある一つの文学作品は一旦表現されてしまうと、それを作った作家、作家をつかさどっている人間性というものとは無関係に、それ自体を一つの客観的な世界として見ることができるのである。従って、本節の分析を含めて、「麦と兵隊」を単純に「侵略戦争文学」と括ることはできない、というような読み方が存在しているのは、作者の思想的立場というより、むしろ作品の自立性、或いは読者の「閲読効果」に重点を置いた所以なのではないか。

四、「ありのまま」

戦中、改造社版の「麦と兵隊」の「前書」で、

葦平はその執筆動機について、「戦場の最中にあって言語に絶する修練に曝されつつ、此の壮大なる戦争の想念の中で、なんにもわからず、盲目の如くになり」と告白しながらも、なお「現在、戦場の中に置かれている一人の兵隊の直接の経験の記録を残して置くことも、亦、何か役に立つことがあるのではないかとも考え、取りあえず、ありのままを書き止めて置くこと」[25]（下線は引用者注）にしたという。

その結果として、すでに指摘したように、中国民衆の小賢しい一面等を表現している葦平は、場合によってはそれ以上のものを読者の前に呈しているし、日本兵の「好意」への描写は、作者の意識・無意識にかかわらず戦争そのものの暗黒さをもある程度曝露している。更に複数の事例から解釈してみる。例えば、「麦と兵隊」の結末のくだりには、捕虜の処分が行われた理由として、「飽く迄抗日を頑張る」「足をあげて蹴ろうとしたりする」などがあげられている。それに作中の抗日文句[26]や激しく苦々しい戦闘場面[27]を加えて、中国兵への憎悪をつのらせようという意図的プロパガンダがどうしても払拭できない描写があるが、誤解を恐れず述べるならば、たとえ「「国策の線に沿う」仕事をしなければならぬと思っている」[28]作者が、それを不本意ながら描いたとしても、それらの表現から同時に中国兵の挫けず頑固な反抗ぶりを窺い知ることもできるであろう。

また、「兵隊三部作」に描かれている中国人像をめぐり、成田龍一が葦平を「帝国の眼差し」を持っている作家と捉えていることはすでに触れたとおりである。この点に関して成田の意見は説得力を持っているが、その文脈でいくと、葦平の作品が日本植民地支配をそのまま描いたものだとすれば、それは日本軍の負の面を記録した書として寧ろ逆に積極的に評価されるべきであろう。詰まる所、「麦と兵隊」には、一見対立しているように見える二面性が併存しているのだが、それを同じことの結果として、つまり同じ「ありのまま」の表れとして扱わなければ、作品の一貫性が見失われるのである。

ところで、最後にこういう問題が残る。日中両国の民衆に対する葦平の分裂した眼差しをすでに検証した。そして、だからといって、彼の作家としての主体性が根本から失われてしまったわけではない、ということも押さえておいた。更に、作品が内包しているプラスとマイナスの両義性の問題は実は同じ創作方法＝「ありのまま」の表れだということも先ほど述べた通りである。この流れで考えると、次にこの「ありのまま」に対して、我々はどのような態度を取るべきかという問題が当然浮かび上がってくる。戦争というものの本当の姿がある程度描き出されていることは、この「ありのまま」なしには到底達せられない効果としてまず評価するが、それがすべてではないということも自明のことであろう。

更に別の視点から考えると、例えばしばしば指摘されたように、「麦と兵隊」の中で、クライマックスともいうべき孫圩での戦闘場面を除けば、戦場・戦闘という非日常の時空間より、その中に投げ込まれた日本兵の日常生活に重点を置いて描かれていることがわかる。果てしもなく続く麦畑の中の進軍、兵隊の垂れた血の混じった赤い糞、連日の行軍で足にまめができ、短い休息の間にむさぼるように睡眠を取ったり御馳走を作ったりする、等々の光景がこと細かに描かれている。そして、そういう兵隊の姿に対して、「私」はいつも「限りなく愛しいもの」、「尊いもの」、或いは「逞しい不敵さ」を感じ取っている。

ここでは、葦平が作品の主な素材として何を選び取っているかということと、その素材

を彼がどういう目でもって見ているかがはっきりとなってくる。このような「民衆」を拝跪する論理、「民衆」に寄り沿う姿勢のゆえに、葦平を「庶民作家」たらしめていることが可能になったわけであるが、そういう肉眼的リアリズムによって造型された人物像が果たして増田周子が主張しているような「真実の兵隊の姿」[29]であるかどうか疑わしい。

一般論として、我々は自分の五感を通して現実世界を認識する以外に方法がないので、その意味において、この「ありのまま」は葦平にとっては成立する。だが、言葉を裏返すと、これはあくまでも葦平にとっての「ありのまま」にすぎないともいえる。現に、日本軍は「逞しくなった」「立派になった」という葦平の文章を読んで、兵隊は皆食料不足で痩せこけているのではないか、「火野よ汝は何を見ているのか」と、戦場で激昂する兵士がいた[30]のである。

ついでにいうと、近年、歴史学における発掘作業がきちんとなされたおかげで、日中戦争下の日本の銃後国民の退廃ぶり[31]が次第に知られるようになってきたが、当初は戦場にいた葦平は何らかのルートですでにそれを知っている。「麦と兵隊」の冒頭部分には、次の一節があるのである。

> 杭州に居る時に、色々な方面で、最近内地の消息が伝えられ、銃後国民の緊張振りは事変勃発直後に比して甚だしく弛緩して居るというようなことをよく聞いた。（中略）今、この荒涼たる戦場の中を走る感懐としては、再び、軽薄な国民に対する憤りが胸の底から湧き上がって来るのを禁じ得なかった。（九頁）

それゆえ、作者によって描かれているこの兵隊像には、銃後の退廃ぶりを暗黙のうちに批判し、いわゆる銃後と前線を結ぶ非常に強固な共感的な一体感を作り出すメカニズムがあったわけである。いわば、時流に便乗している性格を作品は持っているが、たとえそれがなかったとしても作家が自分の思い込みや意図等によって素材の現実的性格をねじ曲げた以上、作中素材は作家の主観を超えて自らの独白の生命を獲得することが困難だし、作品が時と所を超えて普遍的な意味を生み出すとは思われない。

戦後、葦平は「私は戦場に立派な兵隊がたくさんいたことを知っていた。彼等は立派な行動をした」[32]と追想している。金子光晴は、戦場の混乱と兵士たちの苦痛を己の利欲のための絶好の機会とする日本民衆の薄汚れた、いぎたない顔を見続けているが、葦平は、死を賭した戦場の苦痛に、何でもないように処している民衆（兵隊）のもう一つの顔だけしか信じていない[33]。しかしながら、自分の見たこと、感じたことをそのままに描いたなら真のリアリズム文学にはならないであろう。それは、言い換えれば、作者は自分の実生活に裏づけられた認識の枠組みの限界性への意識が希薄であったということである。作家がいわゆる素朴な自分の目を意欲的に乗り越えなかったら、本当の意味においての「ありのまま」に到達することは出来ない。それが葦平という作家の創作方法の弱さでもあり、彼が優れた作家として欠如しているところでもある。因みに、その対極にいる作家の例として、例えば大江健三郎があげられる。大江の「ヒロシマ・ノート」には次のような発言がある。「僕は、そうした自分が所持しているはずの自分自身の感覚とモラルと思想とを、すべて単一に広島のヤスリにかけ、広島のレンズをとおして再検討することを望んだのであった」[34]。或はまた野間宏のように、人生の中にありつつ、人生を離れて見る位置をたえ

ず模索しつつ生きるという姿勢を持っているものもいる[35]。彼らはいずれも、自分の従来の価値観、思考の枠組みを乗り越えて、本当にものが見える目に自己の目を作り変えようとする作家の誠実な努力だと言えよう。

五、おわりに

以上のように、「麦と兵隊」を多角度的に考察した。結論をいうと、生い立ちから来る下層民への共感がありながら、作者の葦平が「異民族」の中国民衆に対する差別的な視線を持っていること、日中両国民に対する分裂した眼差しをもって体制と権力に身をすり寄せてしまったことはこれ以上贅言する必要がなかろう。この点では、成田龍一や安永武人などの指摘に賛同する。

にもかかわらず、同作にはほんのわずかだが、作者の志向している「ありのまま」によって、侵略戦争という苛酷な現実、無残さがある程度描き出されていることも見過ごしてはならない事実である。老婆が「我々」に感激する姿を表現している葦平は、「追従」という言葉を使っている限り、中国民衆の小賢しい一面とともに、その言葉によって裏付けられている日本の兵隊の望ましくない姿をも読者側に暗示している。また、日本兵が中国人女性への「好意」に対する描写は、作者の意識・無意識にかかわらず戦場における彼等の蛮行もある程度曝露している。これらはいずれも、「ありのまま」がもたらす効果として評価すべきであろう。

しかし一方で、本論の最後で述べているように時代の制約もあり、その「ありのまま」とその抉り出し方には限界があったことも見逃してはならない。

付記

・本稿における原文の引用は、すべて「麦と兵隊」『火野葦平兵隊小説文庫1』（光人社、1978年11月）による。論中に本文を独立した段落として引用した場合、すべて引用頁を明記し、それ以外の場合、原則として頁数を省略している。

註

1 例えば、岩上順一は『人間の確立』（万里閣、1947年1月、207頁）において、「我々の前には、火野葦平の「麦と兵隊」、「土と兵隊」、「花と兵隊」より発する侵略戦争文学が存在する」と評価している。

2 山岸郁子「火野葦平の公職追放仮指定に対する「異議申立書」と「証言」」『語文（136）』、日本大学国文学会、2010年3月、175頁。

3 吉田精一『現代日本文学史』、筑摩書房、1965年10月、155頁。

4 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、9頁。

5 安永武人は『戦時下の作家と作品』（未来社、1983年12月、17頁）において、「日本軍の残虐行為を描いていることをもって、直ちに反戦思想や侵略戦争への批判を表現しようとしたとみるのは早計である」とし、「そういう残虐場面の描写は模範的兵隊であり、古武士的人情に富む彼が、彼の中に成立している美化された観念的な「皇軍」―「壮大なる戦争」を戦う天皇の神聖で偉大な軍隊にあるまじき行為として反発し批判したのだとみなければ、作品の一貫性が失われる」と主張している。

6 池田浩士は『火野葦平論[海外進出文学]論・第1部』（インパクト出版会、2000年12月、548頁）において、「「麦と兵隊」の日記体と、「土と兵隊」の書簡体は、いずれも、作者が戦地の現実を真実味を込めて伝えるのに適した表現形式であるばかりでなく、銃後の答えを思い描きながら、或いは先取りしながら、銃後との会話を重ねるための、極めて効果的なスタイルでもある。この表現形式を通して、火野葦平は、兵隊作家である自分に読者が期待するものを、銃後に送り届けたのだった」と指摘している。

7 松本和也「事変下メディアのなかの火野葦平－

芥川賞『糞尿譚』からベストセラー『麦と兵隊』へ」『インテリジェンス（6）』、文生書院、2005年11月、79-91頁。

[8] 増田周子「火野葦平「取りかえばや物語」論―その典拠と改変―」『東アジア文化交渉研究(5)』、2012年2月、関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS、210頁。

[9] 川村湊・成田龍一その他『戦争はどのように語られてきたか』、朝日新聞社、1999年8月、123頁。

[10] 玉井史太郎『河伯洞余滴』、学習研究社、2000年5月、26頁。

[11] この発想は吉本隆明の「漱石をめぐって」（『白熱化した言葉』、思潮社、1986年10月、116 - 117頁）によるところが大きい。

[12] 火野葦平「花と兵隊」『火野葦平兵隊小説文庫3』、光人社、1979年4月、97頁。

[13] 例えば、「土と兵隊」（『火野葦平兵隊小説文庫2』、光人社、1979年3月、63頁）には、「（中国兵は）手榴弾のためにやられたらしく、気息奄々としているのや、真っ黒に顔が焦げたのや、顎が飛んでなくなっているのや、左頬のちぎれたのやが、次々に現れた。彼らはぺこぺこお辞儀をし、手を合わせて、助けてもらいたいというような哀願の表情をした」というのがある。

[14] 火野葦平『革命前後』、中央公論社、1960年1月、115頁。

[15] 例えば、「麦と兵隊」（『火野葦平兵隊小説文庫1』、光人社、1978年11月、81頁）において、多くの「支那兵」の屍骸を見た「私」は、自分が「この人間の惨状に対して、しばらく痛ましいという気持を全く感ぜずに眺めて居たことに気づ」き、「私は感情を失ったのか。私は悪魔になったのか」と自問する。

[16] 川村湊・成田龍一その他『戦争はどのように語られてきたか』、朝日新聞社、1999年8月、118頁。

[17] 一九三八年六月六日、友人の劉寒吉宛の手紙の中で葦平は、「俺としては、兵隊として軍の方針に従い、この頃はやる言葉ではないが、「国策の線に沿う」仕事をしなければならなぬと思っているのだ。それは芸術の堕落では決してなく、むしろ、新しい使命だと思う」（『作家の自伝57 火野葦平』、日本図書センター、1997年4月、269頁）と書いている。

[18] 火野葦平『火野葦平選集第二巻』、創元社、1958年11月、406 - 408頁。

[19] 安永武人『戦時下の作家と作品』（未来社、1983年12月、27頁）によると、戦中版の「麦と兵隊」では、「甚だしい者は此方の兵隊に唾を吐きかける。（中略）掛け声と共に打ち下ろすと、首は毬のように飛び、血が鮴のように噴き出して次々に三人の支那兵は死んだ」という部分が削除されている。

[20] 火野葦平『火野葦平選集第二巻』、創元社、1958年11月、436頁。

[21] 火野葦平『火野葦平選集第二巻』、創元社、1958年11月、408頁。

[22] 越前谷宏は「火野葦平「麦と兵隊」論－検閲をめぐる攻防－」（『日本文学65（12）』、日本文学協会、2016年12月、47頁）において、検閲をめぐる攻防戦の中、葦平は「兵士の「性」の問題を文学的結構のなかに潜ませ、また、毒ガス使用の事実を、「ない」と否定することで、そこに「痕跡」だけは残しておくという方法を取った」とし、「検閲の網の目をかいくぐって、「戦場」の真実を伝えようという火野は、予想以上に、したたかな戦いを繰り広げている」と評価している。

[23] 林芙美子『戦線』、中央公論新社、2006年7月、60頁。

[24] 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、17頁。

[25] 火野葦平『火野葦平選集第二巻』、創元社、1958年11月、426 - 427頁。

[26] 例えば、「麦と兵隊」「五月十一日」（『火野葦平兵隊小説文庫1』、光人社、1978年11月、32頁）のところでは、「土の壁には白墨で、大きく「打倒日本帝国主義」「武装起来保衛郷土」「歓迎浴血抗戦将士」「追放日本倭奴」等の文句が書きつけてある」と書いてある。同様の表現が前述の林芙美子の「戦線」にも出ている。中国軍の陣中画報という新聞で「保国家、衛土地、救百姓、殺敵人」等の抗日文句を見た「私」は、「日本の軍隊の新聞に、かつて、こんな支那をやっつける悪どい漫画が載ったことがあるでしょうか。全く変なものだ」（『戦線』、中央公論新社、2006年7月、36頁）といっている。

[27] 例えば、「麦と兵隊」「五月十六日」（『火野葦平兵隊小説文庫1』、光人社、1978年11月、55 - 56頁）のところには、「迫撃砲弾はいくつも身辺に落下し炸裂する。その度に何人も犠牲者が出て、血の色を見せられる。ただ、その砲弾が、私の頭上に直下して来ないという一つの偶然のみが、私に生命を与えて居る。貴重な生命がこんなにも無造作に傷つけられたということに対してはげしい憤怒の感情に捕われた。（中略）我々の同胞をかくまで苦しめ、且つ私の生命を脅かして居る支那兵に対し、はげしい憎悪に駆られた。私は兵隊とともに突入し、敵兵を私の手で撃ち、斬ってやりたいと思った。私は祖国という言葉が熱いもののように胸一ぱいに広がって来るのを感じた」との一節がある。

[28] 川津誠編『作家の自伝57　火野葦平』、日本図書

センター、1997年4月、269頁。

[29] 増田周子「火野葦平「取りかえばや物語」論―その典拠と改変―」『東アジア文化交渉研究(5)』、2012年2月、関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS、210頁。

[30] 吉見義明『草の根のファシズム』、東京大学出版会、1987年7月、65頁。

[31] 井上寿一『日中戦争下の日本』講談社、2007年7月、18 - 38頁。

[32] 火野葦平『火野葦平選集第四巻』、創元社、1959年2月、428 - 429頁。

[33] 安田武『戦争文学論』、勁草書房、1964年8月、163頁。

[34] 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』、岩波書店、1965年6月、3頁。

[35] 野間宏はかつて『全体小説への志向』（田畑書店、1969年1月、280 - 281頁）において、「そう。作家の位置というのは、現実に、この地球上に足をつけてるわけですよね。足をつけてるんだけど、もうひとつ架空の位置があって、そこに同時にその足をおいていないといけないと考えている。現実に足がついているということが、同時に架空の位置に足がついていることになっているというのが作家だと思うんです。架空の位置というのは、決してむかしの、星の高みからみているという、スピノザ的な架空の位置じゃないんだな。必ず現実に足がついてるんです。しかし、現実に足がついてるというその足が、また架空の一点についていなければならない。（中略）架空の位置ですからね。必ずおちるんですよ。すぐに落ちてくるんですよ。すぐに落ちてくるが故に、ものがみえるわけです」といっている。